

明治前期における局地的市場圏と地域博覧会

～奨国社自由民権運動の経済的文化的基盤～

The Local Market Area and the Regional Exhibition in the Early Meiji Period

The Economic and Cultural Foundations of the Shōkyōsha Society in the Freedom and People's Rights Movement.

上 條 宏 之 Hiroyuki Kamijo

はじめに

大塚久雄は、イギリスにおける近代化の歴史的起点として、中産的生産者層による局地的市場圏 local market area の形成を理念型として析出した。そして、明治維新前後の日本の農村にも、局地的市場圏形成の芽がふき出ていたとみた。特に、1966年秋の土地制度史学会の大会報告、棚沢竜吉「封建村落内部に於ける職業分化の状態」に関し、信州佐久郡横根村（現在は佐久市上平尾）に見られた「局地内分業」の展開事例に注目している（注1）。局地的市場圏の形成は、内発的近代化のメルクマールのひとつと位置づけることが出来る（注2）。

一方、1851年のロンドン万国博覧会に始まる博覧会は、日本にとって西洋文明からの「まなざしの近代」「科学と文化」の導入であった（注3）。林屋辰三郎は、1867年（慶応3）に日本がパリ万国博覧会に招請をうけた際、外国奉行栗本鋤雲が exhibition に「博覧会」の訳語を当て、1872年（明治5）文部省博物館が行った湯島大成殿の展示に初めて「博覧会」の称が用いられたこと、その趣旨が「天造人工ノ別ナク宇内ノ産物ヲ蒐集シテ、其名称ヲ正シ其用法ヲ弁シ人ノ知見ヲ広ムルニ在リ」と謳ったことに着目し、博覧会・博物館を「文明開化と古物保存」の脈絡の中で捉えた（注4）。また有賀義人は、松本の初期自由民権家である市川量造研究の中で、筑摩県のもとで1873年（明治6）11月10日に松本城天守櫓で開幕した第1回松本博覧会が、天守櫓を常設博覧館にしようとする市川の構想を契機としていたこと、翌74年に県下7か所で7回、75年に8か所で10回、76年に7か所で7回地域博覧会が開かれたことを明らかにした。それぞれの博覧会の内容は、「骨董博覧会」の性格を持っていたが、総合的に見れば「新たにナショナリズムに目ざめた日本人」の形成、国民を「国際間に伍してひけをとらないような人間に啓蒙したい」とする筑摩県の博覧会理念に

よった、と評価した（注5）。

これにたいし、吉見俊哉は、前世紀から今世紀にかけて全盛期を迎える博覧会を、「集まってきた人々の社会的経験の歴史として捉え返し」た場合、「帝国主義のプロパガンダ装置としての博覧会、消費文化の広告装置としての博覧会、大衆娯楽的な見世物としての博覧会という三つのテーマ」の現れや重なり合いを読み解くことができるものとし、「権力装置としての博覧会」に焦点をあて、「博覧会の政治学」を「まなざしの近代」の概念として提示した（注6）。吉見は、ロンドン・パリ両万国博会場で日本人自身も「展示品」となったことを含め、「博覧会とは、その透明な分類学的秩序のうちに、地球上で『発見』されるすべてを記号としていくまなざしの空間である」と定義した（注7）。氏は、博覧会の意義や効果を産業発達史との関係で捉えようとする研究等が、意義のある成果を挙げたことを正当に評価しつつも（注8）、日本初の本格的な産業博覧会となった1877年の第1回内国博覧会以前の、松本など県内各地でも開かれた地域博覧会については、「多くは、実際には江戸時代の開帳や物産会、薬品会に近く、いまだ見世物的な性格を色濃く残していた。」と指摘している（注9）。

吉見による、会場に集まった人々に外から与えられた「まなざしの近代」として博覧会を捉える方法にたいし、私は本稿で、信州安曇郡^{ひといちば}一日市場（現在の南安曇郡三郷村）の民衆が、政治的近代民主主義を提起した自由民権結社奨国社の運動に取り組むとともに、局地的市場圏形成と連動させて地域博覧会を企画・実現させた経済的文化的営為を明らかにし、経済的民主主義の近代的基盤創出に取り組んだ歴史的意義を評価したい（注10）。

1. 蚕繭市場・土地産物市の開設

筑摩県安曇郡一日市場村に、1873年（明治6）市

場が開設された。一日市場の歴史は中世に遡る。
『享保六辛丑年 水野耆岐守様御分地拾壺ヶ村郷鑑』
(白木佐五右衛門扣)には、一日市場について、「当
村古者大市立申候得共、度々焼払」われ、「其後七
拾五六年先迄市立申候得共、潰れ候由申伝候」とあ
る。小笠原貞慶のもと天正11年(1583)に白木・材
木・薪などの市が立ち、正保年代(1644~48)まで
大市が立ったと言われる一日市場であったが(注11)、
幕末には松本藩による市場開設認可の枠内に押しと
どめられていた。

1873年に再興された市場では、繭や土地産物・牛
馬などが商取引されている。その中でまず、蚕繭市
場が開設された理由と経過を見ると、73年7月筑摩
県権令永山盛輝に提出した願書に次のようにある。

乍恐奉願口上書

当村之儀者前々より繭市立来り罷在候処去ル明
治二巳年七月旧御庁より更ニ蚕繭市場御免許ニ
相成正路ニ商販仕候ニ付諸方之都合ニ相成難有
御事与奉存候間自今村内江布物相建再興仕度奉
願上候何卒出格之以 御仁恵御許容被成下置候
様奉願候以上

明治六年酉七月

安曇郡六拾五区一日市場村

願人	池上 定衛印
同	百瀬 守一印
同	三溝 晴見印
副戸長	白木平一郎印
同	白木伝六郎印
同	白木長九郎印

筑摩県権令永山盛輝殿

1869年(明治2)旧暦7月に、松本藩から蚕繭市
場開設の免許を得て、従来のもつ(繭)市場の実績の
上に、新たに正路の商販を行い「諸方之都合」をよ
くしたので、今後は「布物」を建てて蚕繭市場を再
興したいとある。また市場の形態は、次の「奉願上
候」に伺うことができる(注12)。

奉願上候

近歳養蚕之儀追々相行れ年増繁盛ニ罷成候ニ付
追々御規則等被仰出難有奉拝承候然ルニ当村之
儀者他方へ対し諸品運輸等便宜之地ニ付元来繭
仲買生糸製造之者等多人数有之候儀ニ付既ニ旧
御支配中モ願上御免相成既ニ一時辛未年迄繭市
場等相開キ来り候儀ニ御座候就而者今般私共申
合尚又従前之通り市場相立申度奉存候尤被 仰
出之御主意ニ基キ聊不正不都合之儀等無之様情々
注意可仕儀ニ御座候右御採用相成候上者蚕繭市
場ト相唱江都而繭之儀正路ニ売買等仕度左候ハ
ハ私共之便利而已ニ非ス近郷近隣迄之弁利共相
成可申事与奉存候間毎年六月より九月迄四ヶ月
之内一四六九ノ日市定日仕度此段 御許容被
成下置候様奉願上候以上

明治六年七月七日

一日市場は、近年の養蚕業発展の中、諸品運輸に
便利な地であり、繭仲買・生糸製造人が多い地であ
ることから、松本藩支配下でも1871年(明治4)ま
で繭(繭)市場を立てていた。その後休止せざるを
得なかったこの市場を再興し、「蚕繭市場」と唱え
て繭売買を正路にするつもりで、これは近郷近隣の
便ともなると主張する。「蚕繭市場」は単なる繭市
場の再興にとどまらず、地域商工業者が主導する局
地的市場圏の形成となった。市は養蚕の時期に対応
させ、6~9月の4か月間開き、1, 4, 6, 9の
日を市の定日とした。筑摩県は、この願上にたいし、
戸長・副戸長が市場取締に注意することを条件に、
「願之趣聞届候条、兼而相触置候規則ニ照準可取計
事」と、同年7月に許可した。

一日市場の商工業従事者57人が6人の代表を選び、
大区小区、村々の行政担当者とも連携し、組織的な
動きの末に、松本藩に開設を拒まれた市場を筑摩県
のもとに開設したことは、次の資料からわかる。

当村江市場相願候義者前々戸田公御支配中五七
名ニ而精心再応願上候得共御許容ニ不相成然ル

処今般願人六銘并ニ第九大区戸長中申談示願立
候処速ニ諸物品之市場御免許ニ相成右ニ付規定
左ニ記

一市場ニ付願書其外大切之書類者鎖附之箱入ニ
致シ置毎年初市之節六銘打寄相改当籤之者翌
年初市迄相預り置可申鍵者五名ニ而隔番ニ相
預り可申事

但預り人ヨリ請取書差出し可申事

一市場書類之儀者後年ニ至り候而茂六銘之内ニ
而無紛失大切ニ注意可致事

一市場願ニ付庶雜費拾壱円九拾五錢相掛り六銘
ニ而出金致し候事

一六銘之内鬭引ニ而老人年番与相定其宅江集会
致シ万事取計可申事

一市場願ニ付而者三溝晴見義格別勉力致シ候事
右之条々取定候上者以来不実意無之市場繁盛ニ
相成候様互ニ注意可致候者也

明治七年戊四月

願人 百瀬茂平次

同 池上 定衛印

同 百瀬 謙三印

同 三溝 晴見印

同 高山 正重印

同 百瀬 守一印

連署した6人は市場代表である。「鎖附之箱入」
書類を管理し、初市に始まり翌年初市までの年間商
業活動を隔番で担当し運営する。市場願いに必要な
経費も6人が負担した。なかでも年番は自宅を集会
の場に提供し、万事に責任を持つ。三溝晴見が格別
「勉力」する担当とされている。

三溝晴見(43歳)は、1880年に自由民権結社奨匡
社に入る。同年、長女の夫で晴見の養嗣子茂久太
(31歳)は、製糸製造(25人取り、資本金100円未満)
を、二木与八・種山清三・布山清一郎と協力し、一
日市場の中央にあった35坪の建物で営み、薬種小
売商も兼ねていた。生糸は、1879年の『明盛村誌』

(注13)に「凡五駄横浜へ輸出す」とあることから、
海外輸出に当てたと推定される。晴見は茂久太に家
業を任せ、市場の公的な仕事に打ち込んだのである
(ただし、茂久太が相続し、晴見が隠居したのは
1885年2月)。

彼等が市場開設に託した期待は、1874年(明治7)
3月に纏められ、筑摩県に提出された。

奉願口上書

近歳商法之道逐々相開ケ随而産出之物品数種有
之候処兎角分隔之村落ニ而者土地土地産出之物
品売鬻又購求之道也大ニ其便ヲ得ス方今正明之
御時節人民自由之便ヲ得ルノ時ニ当リ遺憾之至
リニ奉存候依而最寄之地江諸物品之市場ヲ相立
近隣各所課出之産物或者菓細工ニ至迄悉皆市場
江差出シ時ノ相場ヲ以テ商販仕候へ者衆庶之便
利不少奉存候茲ニ当村之儀者繭糸之市場ニ而便
宜之地ニ候間右市場之名唱当村江御許容被成下
候様奉願上候聊私欲私意等之義ニ而者無之百事
人民之便利ヲ得セシメントノ厚キ御主意ニ基キ
候素志ニ御座候間此段出格之以 御詮儀願之通
御免許被下置度依之隣区戸長連印致シ奉懇願
候以上

明治七年三月

安曇郡第九大区小八区一日市場村

願人 高山 正重

同 百瀬茂平次

同 百瀬 謙三

同 三溝 晴見

副戸長 百瀬豊三郎

同 白木平一郎

右区戸長 等々力与八

六小区戸長 横山 源吾

五小区戸長 小穴 愛二

七小区戸長 山口 庫吾

三小区戸長 森本 六郎

二小区戸長 川越 啓吉

一小区戸長 奥原 権左

四小区戸長 中澤 優三

第十大区二小区戸長 飯田伴十郎

筑摩県権令永山盛輝殿代理

筑摩県権参事高木惟矩殿

近年商法の道が開けたことを、産出物品の種類の増加に見ている。しかし「分隔之村落」では「土地土地産出之物品」の売買が不便であるので、「人民自由之便ヲ得ルノ時ニ当リ」、「最寄之地」へ市場を立て、近隣各所の産物から藁細工に至る農村工業製品を、「時ノ相場」で商売したいと謳っている。局部的市場の成立と拡大を必要とする土地土地の物産があり、地域に「時ノ相場」が成立していたのである。連印がこの文書にないので下書きと思われるが、「人民自由」「衆庶之便利」「百事人民之便利」の立場から市場開設を主張している。

市場は、1875年（明治8）になると夜店を開くなど、新しい展開を示した。次の「奉願口上書」が、その辺の事情を描いている。ここでは、三溝晴見ではなく茂久太が願人になり、白木鉄平（15歳）も副戸長を努めた父長七郎（34歳）に代わって願人になった。願人の一人藤澤永吉（26歳、養父幸三は小間物・荒物小売商）もやがて奨励社員となる（注14）。

奉願口上書

当今商法ノ道逐々盛ニ相成随テ当村之義ハ諸産物ノ市場ニテ毎月一六ノ日ニ商行罷在候処茲ニ近里ノ一般農務ノ時ニ至テハ夙ニ起耕耘シタ部ニ至テ藁工ヲ営聊産業ニ違アラスシテ諸品売買ノ自由ヲ得ス遺憾ニタヘサルニ付願クハ夜店ヲ肇行仕度尤寒凍ノ候ヲ除テ毎歳三月ヨリ十月迄連月三才ニシテ一ノ日ヲ相定メ夜ニ赴テ肆ヲ相開キ商社競テ正路ヲ旨トシ販売仕候得者庶人者産務ノ余間ニ至テ必用ノ物品ヲ相求メ又産出ノ物品者売捌キ売買弁別仕候様相行ヒ申度然ル上者農商ノ便利不少義ニシテ土地繁栄ノ基礎ニ相成難有仕合ニ奉存候間此段出格ノ以 御詮儀

右夜店商 御允可被下置候様奉願上候以上

明治八年七月

第九大区八小区

安曇郡明盛村一日市場耕地

願人 藤澤 永吾印

同 高山 正重印

同 三溝 半平印

同 白木 鉄平印

同 池上 萬平印

同 白木伝一郎印

同 三溝茂久太印

筑摩県権令永山盛輝殿

前年の市場願いは、他地域の産物を含む、より広域の商品流通の場を形成しようとするものであった。この時期の一日市場は毎月1と6の日に開いていたが、朝夕まで含む昼間の農務労働等に忙しい人々が活用しにくかったため、産出する物品を売り捌き日用必需品を購入できる夜店の開設を要望した。3月～10月の1の日に開かれる三才市に夜店を開くことで、「農商ノ便利」「土地繁栄ノ基礎」を築こうとしている。

1876年（明治9）4月には、明盛村一日市場の市場世話人が、筑摩県の広報紙も兼ねていた『信飛新聞』（第138号、明治9年4月29日）に、市場の広告を載せた。

一土地産物ノ市 来ル五月一日ヨリ同二日迄開キ候

一馬市 毎歳五月十七日ヨリ廿一日迄八月十七日ヨリ同廿一日迄

一繭糸ノ市 毎歳六月ヨリ九月迄ノ間ニ方テ之ヲ開ク

一蚕影山大神ノ祭典 毎歳五月一日ヨリ同三日迄

一全 祈祷 毎歳七月廿一日ヨリ同廿三日迄
其外古手類諸器械ノ寄糶市アリ

子四月

安曇郡明盛村ノ内一日市場 市場世話人

繭糸市については、4か月間に月4回開く前年の例をすでにみた。この広告からは、土地産物市・馬市の存在、さらに養蚕の祭典、出来不出来の多い養蚕が順調であるよう「祈祷」で願う、いわば養蚕農民の精神世界のあり方も伺うことができる。市場の運営については、1876年7月29日池上定衛が、戸長及び副戸長6人の連印を得て、「繭糸の市場 右は去る明治六年七月御許容に相成、毎歳相立来り候に付、八月二日右市場相立申度、尤御成規の通、税金上納可仕候、此段御届奉申上候」と「御届書」を出し、実施している。

一方、土地産物市も1874年から開かれた。76年4月25日に三溝晴見が願人となり、戸長中野闌の奥印を得て筑摩県に出した「御届書」には、次のようにある。

御届書

土地産物之市場

但し物産概数 足袋裏木綿桑種葉細工琉球苳
藍玉炭

右市場之義ハ去ル明治七年三月蒙 御許可毎年相立来り候ニ付猶又本年五月一日ヨリ二日右市相立申度候間則税金之義ハ御規則之通上納可仕候此段御届奉申上候以上

筑摩県参事高木惟矩は開催前日の5月1日に聞き届け、守るべき諸条件として、市場取締を行うこと、警察出張所にも市場開設を届けること、成規の税金を納めることを指示した。県への納税が市場開設の必修条件となったことは、公的に市場が認められるとともに県のシステムに制約されることを意味し、彼等の県政のあり方に関心をもち政治観の形成とも関連することとなる。

物産概数に示された土地産物と関係する1876年、77年ころの土地産物は、各村誌に第1表のように記載されている。これにより、葉細工は草履が主で、琉球苳は畳表であることなどが明瞭となる。

第1表 三郷村域の産出器用物など

村	産出物	出来高	備 考
明盛	琉球表	500 枚	松本へ
	草履	21,000 足	松本へ
	足袋底	40 駄	上州・武州へ
	生糸	5 駄	横浜へ
温	畳表琉球	250 枚	
	鋤	50 枚	
	鋤	10 挺	
	鎌	120 枚	
	稻核具	30 挺	
	足袋裏	10 箇	
	生糸	4 箇	
	繭	620 貫	
	蚕種	50 枚	
科布	畳表琉球	130 枚	
	鎌	100 枚	
	鋸	850 枚	
	蓑	500 数	
	薪	1,300 駄	
	足袋裏	25 個	上州へ
	蚕種	343 枚	
	生糸	6 個	横浜へ
	繭	240 貫 200 目	上州へ

『長野県町村誌 南信篇』より作成

筑摩県廃止、長野県へ合県後の1878年（明治11）になると、「市御願」の手続きも簡素化され、実施日前日に県への届けが行われ、警察分署にも届けて実施されている。土地産物は農村工業製品で、年によって幾分変化はあるが、足袋裏、琉球苳（畳表）、葉細工、木綿、桑種などが共通している。

市御願

土地産物市 四月十九日

産物之概品 足袋裏葉細工琉球苳木綿桑種
右者蒙 御許可毎歳相立来り候ニ付猶又四月十九日ニ市相定申度尤御成規之税納可仕候間此段

御許可被下置度奉願上候也

明治十一年四月十八日

南第九大区八小区安曇郡明盛村

願人総代 三溝 善蔵印

副戸長 小松錠太郎印

長野県権令檜崎寛直殿代理

長野県少書記官松野篤殿

前書之通願上候ニ付奥印仕候也

南第九大区区长代理

戸長 森本 六郎印

願いは4月18日に聞き届けられ、やはり「但、最寄警察分署可届置事」と指示されている。

1880年(明治13)になると、地方税規則実施により、上納する税金が「県税」から「地方税」へ名称変更されるなどの事態を踏まえた願書となっている。産出の概略は、「足袋裏、桑種、木綿、太糸、炭、芋種、藁細工、琉球莞莖、蚕網、真綿等、其外追々開産之品」と従来より養蚕関係の品目や芋種がふえ、次の「奉願」が提出されている。願人総代の白木佐々久は氷豆腐小売商、稲葉源三(柳三弟)は足袋小売商、三溝房吉は小間物小売商・石油小売商・荒物小売商を兼ね、二木庄吉も荒物小売商・乾物小売商を兼ねていた。

奉願

但シ産出ノ概品足袋裏桑種木綿太糸炭芋種藁細工琉球莞莖蚕網真綿等其外追々開産之品

右ハ当村一日市場ニ於テ過ル明治七年三月願上既ニ市場ノ名称蒙御允可爾来年々相立来リ候処市税等ハ是迄県税ニ候得共嘗テ地方税ニ御改正相成候ニ付猶更ニ今回願上従前之通市相立申度尤一日市場ハ家屋連檐之地ニシテ商販ニ取テハ至便ナルヲ以茲ニ市場ヲ相設ケ開場ハ毎歳毎月廿一日ヲ定市トナシ其都度御許可ヲ乞ヒ御成規ノ税納ハ勿論万般不都合無之様注意ヲ要スル素志ニ御座候間市場規則書并ニ絵図面相添上申仕

候此段特別ノ以御詮議ヲ御許可被成下置度奉願上候以上

明治十三年八月十四日

南安曇郡明盛村

願人惣代 白木佐々久印

稲葉 源造印

三溝 房吉印

二木 庄吉印

戸長 降旗 吉十

長野県令檜崎寛直殿

前書之通相違無之奥印仕候也

明治十三年八月三十日

南安曇郡長関口侯彦代理

南安曇郡書記 松尾重義

一日市場は「家屋連檐之地」とある。これは、一日市場を中心とする明盛村の1880年における商工業従事者が第2表のように、仲買商32軒、小売商85軒、紺屋14軒(179瓶)、行商7軒、機具(稲核具貸出と思われる)9軒21具、雑商(箱張)4軒、旅籠3軒、水車7軒44臼などからなっていたことと関連があった。ここに、農村工業製品を扱う市場が開かれたのである。

市場規則書は、1880年9月25日に南安曇郡役所から明盛村戸長中へ通達された文書類のなかにある。

第2表 明盛村の商工業者(1880年9月)

商工業	税 額	職業等	店数	市場代表等
仲買商甲類	税3円	水 油	2	
		足袋裏	1	
		呉 服	1	
仲買商乙類	税2.5円	繭	12	百瀬守一
		菓 子	1	
		足袋裏	5	池上定衛
仲買商丁類	税1円	穀 物	10	
仲買商		計	32	
小売商甲類	税2円	呉 服	3	
		小間物	7	三溝房吉
		茶	1	
		蚕 種	4	

小売商乙類	税1.5円	薬 種	1	三溝茂久太（晴見養子）
小売商丙類	税80円	太 物	1	
		菓 子	1	
		紙 油	2	高山庄十（正重）
		足袋裏	1	三溝房吉
		足 袋	9	穂刈関郎次
		醬 油	4	稲葉源三、稲葉柳三
		荒 物	1	
			10	三溝房吉、藤澤幸三（永吉父）、二木庄吉
小売商丁類	税30円	小白木菓 子	4	
		酢 菓 物	13	白木伝一郎
		乾 物	1	
		竹細工	7	
		水豆腐	1	二木庄吉
		雑菓子	1	
		革 類	3	白木佐々久
		鶏 卵	1	
類外	税10円	計	1	
小売商			7	
			85	
紺屋（瓶）	税1円		14	（瓶は179）
行商	税1円		7	
雑商	税50銭	箱 張	4	
製糸製造	税1円	四等製造所	1	三溝茂久太（晴見養子）
質屋	税1円		3	
理髪床	税75銭		3	
相撲	税3円		2	
漁業	税25銭		1	
煮売	税25銭		4	
機具	1挺3銭	3挺	3	
		2挺	6	穂刈関郎次
旅籠	税2円	下	1	百瀬玄三松
	税1円	下々	2	
薬種掘り	税10銭		1	
水車			7	（臼は44）

『明治十三年九月 商業人別取調帳』より作成

乙番外

其村白木佐々久外三人ヨリ嘗テ願出来市場再興之義ハ本県ヨリ達越ニ付開場以前其都度日限取定当役所へ出願候様願人共へ通達スヘシ此段相達候事

明治十三年九月廿五日

南安曇郡役所 役所印

明盛村戸長中

右市場願之義ニ付郡役所ヨリ役場へ御達書私共へ御渡シ有之正ニ御願申置候也

明治十三年十月五日

願人 白木佐々久

同 三溝 半平印

同 稲葉 源造印

同 二木 庄吉

戸長 降旗 吉十殿

市場規則書

第一条

一市場手数料之義者商業人該場ニ於テ売買スル金額百分ノ一ヲ願主ノ場江受取可申約ヲ相結ビ是ヲ市場ノ揚り高トス

第二条

一市場税納ノ義ハ本県乙第九拾壹号賦課税規則第四条五条ニ基キ取計可申事

第三条

一手数料揚り高百分ノ三ヲ納税トナシ残り高ヲ市場諸費等ニ充用可致事

第四条

一開場セント欲スル時ハ其都度其筋ノ御許可ヲ請フベキ事

第五条

一開場中御禁制ノ義者勿論火ノ元用慎都テ不取締之義無之様願主ニテ精々注意可致事

第六条

一市日ハ年々毎月廿一日ト定メ其時々第四条ノ手續ニヨルベシ尤御允可ヲ得候上者広告ノタ

メ開市ノ標札ヲ万方ヘ揭示可致事

第七条

一開場中御主意ノ趣確守シ渾テ御成規ニ抵触不
仕候事

前記条款之通取計候ニ付規則書申呈仕候也

明治十三年八月十日

南安曇郡明盛村一日市場

願人惣代 三溝 房吉印

稲葉 源造印

白木佐々久印

二木 庄吉印

戸長 降籙 吉十

長野県令檜崎寛直殿

前書之通相違無之奥印仕候也

明治十三年八月三十日

南安曇郡長関口侯彦代理

南安曇郡書記 松尾重義

市場手数料として、市場売価の100分の1を願主に払うこと、市場税は長野県賦課税規則に基づく税額であること、手数料の揚がり高のうち100分の3を納税し残高を市場の諸費に当てること、開場しようとする都度県の許可を得ること、開場中は願主が規則を守り火の元を初め取締をすること、市日は毎月21日としそのたびごとに県の許可を得て開市の標札を掲示することなどが、規則書に謳われている。

すでに見た『明治十三年九月 商業人別取調帳』によると、池上定衛は足袋裏仲買商（乙類）、百瀬守一は繭仲買商（乙類）、三溝晴見・長男三溝茂久太は製糸製造と薬種小売商（甲類）、穂刈関郎次は足袋裏小売商（丙類）と機具（稻核具）貸出二挺、白木伝一郎は菓子小売商（丙類）、高山庄十（正重）は紙小売商（乙類）、稲葉源三は足袋小売商（丙類）、二木庄吉は荒物小売商（丙類）・乾物小売商（丁類）、白木佐々久は氷豆腐小売商（丁類）、三溝房吉は小間物小売商（甲類）・石油小売商（丙類）・荒物小売商（丙類）などを営んでいる（第2表）。

土地産物市・蚕繭市は、一日市場を中心に明盛村の商店・工場などの日常的商工活動の上に開かれたものであった。

2. 馬市場の再興

1873（明治7）9月には、一日市場から「馬市之願書」も筑摩県に提出されている。一日市場は、安曇郡大町村とともに馬市の地として近世から知られていた。安曇郡明盛村のうち一日市場耕地から単独で出された「馬市之願書」は、次のような文面である。

奉願口上記

当県御管下安曇郡農民耕業ニ相用其他諸品運輸ニ相用候馬之儀七ヶ年以前辰年迄毎歳一会ツ、毛附与相唱最寄之地江馬市相立村々産出之小馬者勿論牽出シ馬業之者は他国ヨリ上品之馬牽来り売買弁別仕候処近来其儀無之自然産出之駒売捌又求ルノ道也大ニ其便ヲ得ス困難仕候者不少依而年々五月九月二会馬市相立正当正路ニ売買為致候得者庶民之弁別ニ相成土地幸福与も奉存候随而当村之儀者産物之市場ニ而他方江対シ最寄便宜之地ニ付右市場之名唱 御許容被成下置候様奉願上候聊私欲私意等之儀ニ而者無之百事人民之弁利ヲ得センメントノ厚 御主意ニ基キ候素志ニ御座候間概略法則相添奉差上候間此段出格之以 御詮儀願之通 御許可相成候様奉懇願候以上

明治七年九月

安曇郡第九大区八小区

明盛村之内一日市場耕地

願人 白木伝十郎印

同 池上 定衛印

同 百瀬 守一印

同 百瀬 謙三印

同 百瀬茂平次印

願人 三溝 晴見印
副戸長 百瀬豊三郎印
同 白木平一郎印
第九大区総代戸長 等々力与八印
同所 戸長 森本 六郎印
第十大区総代戸長 飯田伴十郎印
筑摩県権令永山盛輝殿

この願書を、筑摩県は「一耕地ニテ願出候者不条
理ニ付、一村協議之、村吏連印ニテ可伺出候事」と
9月19日に返却する。県は、小地域の独自性を抑え、
同年合併したばかりの明盛村の協議を要請した。

そこで願主たちは、恰も馬市再興を企図していた
大町村とも連絡をとり、1874年（明治7）10月に明
盛村・大町村関係者で連署した「奉願口上記」を提
出した。冒頭の文章は、9月に一日市場から提出し
たものとほぼ同じである。馬市開催月を「五月、十
月」とするなどの変更が見られるところは、次のよ
うに書かれている。

（前略）売買弁別仕候処近来其儀無之自然産出
之駒売捌又求ルノ道也大ニ其便ヲ得ス困難仕候
者不少依而年々五月十月馬市相立正当正路ニ売
買為致候得者庶民之弁利ニ相成土地幸福与も奉
存候随而当郡明盛村之内一日市場耕地并ニ大町
村之義者諸産物之市場ニ而他方江対シ最寄便宜
之地ニ付第九大区ヨリ十二大区迄之内申談儀行
届候間右両所江馬市場之名唱更ニ御許容被成下
置候様奉願上候聊私欲私意等ノ義ニ而者無之百
事人民ノ弁利ヲ得セシメントノ厚 御主意ニ基
キ候素志ニ御座候間概略法則相添奉差上候間此
段出格之以 御詮儀願之通 御許可被成下度正
副戸長連印イタシ奉懇願候以上

第十二大区一小区安曇郡大町村の願人は西澤義一・
曾根原勘次で、副戸長福嶋孫三郎、戸長栗林球三が
連印した。明盛村の願人は穂刈関郎次・白木伝十郎・
池上定衛・百瀬守一・百瀬謙三・百瀬茂平次・三溝
晴見の7人で、副戸長の百瀬豊三郎・白木平一郎・

胡桃澤富衛・降籬吉十・飯沼角平および戸長の等々
力与八が連印した。

「奉願口上記」には、次の「法則書」が添えられ
ていた。大町と一日市場は馬市を交互に年2回、3
日ずつ開催することとし、市場でのルールを説明し
ている。

法則書

第一条

一馬市定日之儀者毎歳五月十一日ヨリ十三日迄
大町ニ而相行ヒ五月十五日ヨリ十七日迄明盛
村ニ而相行ヒ十月廿二日ヨリ廿四日迄大町ニ
而相行ヒ十月廿六日ヨリ廿八日迄明盛村ニ而
相行ヒ市日中者村吏及ヒ願人之者市場江罷出
居取締リ向嚴重ニ注意イタシ其他馬飼葉等迄
差支無之候様厚世話可致事

第二条

一馬売買ニ相成候分者御規則之通壱疋ニ付拾銭
税納可仕候事

第三条

一五月中耕務ニ相用候貸馬市大町限り従前之通
相行ヒ申度候事

第四条

一馬売買之義者弁利ヲ主与シ双方ヨリ実情ヲ聞
糺シ之上代金ヲ記帳シ不実意無之様取計可申
事

第五条

一御主意之趣聊悖戾等無之市日中厳確ニイタシ
猥ニ酒食等不仕候事

右之通法方相附奉願上候間何卒御許可被成下度
候以上

明治七年十月

第十二大区一小区安曇郡大町村

願人惣代 西澤 義一印

戸長 栗林 球三印

第九大区八小区安曇郡明盛村

願人惣代 三溝 晴見印

戸長 等々力与八印

筑摩県権令永山盛輝殿

この願いは、1874年（明治7）12月7日に筑摩県庁に聞き届けられたが、規則書第三条にある大町貸馬市については、別にその都度願いを出すように指示があった。貸馬とは、農耕に使うために大町周辺から耕耘期に馬を借りることで、安曇郡内や筑摩郡内の村々の農民たちがこれを利用した。

大町村では、近世末期から1871年（明治4）まで、年々「作馬市」が15日間、売買と貸借の場として開かれていたが、大きな制度改革期であった1872、73年には、市を休んだ。しかし、安曇郡内では牝馬・牝牛の飼育が多く、大町の馬市には、甲斐・駿河・美濃などからも馬喰渡世人が来ていたので、休市になると馬持ち一同が困難をきたした。そこで、従前のように、1874年5月15～17日及び10月26～28日に馬市（牛も扱う）を開業する計画をたて、筑摩県に願い出たのである。

1874年10月に再開された馬市は、76年8月には「御届書」を、百瀬茂平次が戸長及び副戸長6人の連印を得て願い出、「御伺書」を、馬市会社惣代の百瀬茂平次が提出、認可を受けて開かれた。

「御伺書」は、馬市を8月27日～9月1日に開催し、税金は市が済み次第、成規に従って上納するもので、馬市の歴史・主旨などを略述している。一日市場の馬市は、元来「毛附市」と唱え毎年旧暦八月三日を定市とし、第九大区八小区に属する村々で産出された子馬を悉皆牽出し売買する仕来りであった。しかし、1870年（明治3）より松本藩支配に改革が起こり、その後5年間休業、1874年（明治7）12月の馬市再興願いが認められ、「馬市御免」となった。

馬市休業中は、各村が勝手に毛附市を立てて来たので、市税規則に随い正当正路の売買・弁別を行うこととしたとする。土地産出の子馬の売買を希望の者は全て牽出し、第九大区・第十大区に属する村々に馬市の開催とルールを知らせ、他国よりの馬業人

は勿論、希望者の出入りを自由とするので、馬市は盛大になり、土地の幸福が少なくないと主張して、県の認可を求めた。

なお、明盛村の隣村温村野沢の務台景満家では、息子の量平が1877年5月29日に木曾福島馬市に出掛け、黒の牝馬2歳を買い求めている。雑費とともに馬購入費は14円2銭で、量平は6月4日に帰村し、馬を他へ預け置いた。務台家は一日市場の馬市でなく、木曾馬の産地である福島馬市へ出向いたのである（注15）。

1876年4月、明盛村扱所は牛馬を所持する村人に鑑札を渡し、『明治九季四月 牛馬鑑札渡請印帳 明盛村扱所』を作成している。それには、4月25～29日に鑑札を受けた村人が請印している。鑑札枚数と渡した月日が書かれたものに、記名捺印がある。①鑑札1枚が59人、②鑑札2枚が9人で、鑑札1枚には、村役人・市場願人の飯沼寛平・中野闌・等々力与八・百瀬茂平次らがみえる。4月29日付からは、鑑札枚数の記述がなく、牡馬か牝馬か、「青」「鹿毛」「栗毛」「黒」「本黒」かなどを書き込んだ部分が続いている。③牝馬1疋飼育が14人、④牡馬1疋が28人、⑤牡馬2疋が2人、⑥氏名のみで馬の牡・牝別、疋数不明のもの1人、⑦牡か牝か不明の馬1疋所持者1人となっている。この部分には百瀬謙三、降籬吉十がみえる。この後半部分の人々にも鑑札を渡したと考えられ、①から⑦のうち、⑥を除き、②の鑑札2枚を馬2疋と数えると、馬は125疋となる。1879年（明治12）6月の村誌記載の馬数は、牡馬84頭、牝馬125頭、総計209頭とある（第3表）。

1879年（明治12）の馬市は、規則書改正で、次の「奉願」を出して、百瀬謙三の所有地を市庭として馬市が継続された。市庭に馬市場を設定するための願いは、次のようなものであった。

奉願

抑当村ノ馬市ハ元来毛附市ト称シ連年相立来リ
候処百事御維新以降一先廃業トナレリ然ル後明

治七年中猶又願上既ニ再業ノ蒙御允可ヲ乃シ旧
 慣ノ如ク土地産出ノ小馬牽出シ又営業人ハ万方
 ヨリ駿々ト良馬ヲ牽来リ正路ヲ主トシテ売買ヲ
 専ラ相行ヒ候ニ付庶民ノ便利而已ナラス土地ノ
 幸福鮮少ナラザルナシ夫恩沢ノ浴スル処ト豈感
 佩セサラン者アラヤ然ル処馬市ノ規則御改正
 ニ相成其御布令ニ拠テ尚更ニ今回願上従前之通
 馬市相立申度付テハ当村地引千六百九拾貳番宅
 地持主惣代百瀬謙三右地所貳百九拾壹坪之内ヲ
 市庭トナシ開場者毎歳九月十五日ヨリ廿一日ニ
 迄ル七日間興行仕度候^{マツ}尤其都度御届申上興行中
 取扱等者素ヨリ維持ノ法方設ケ置タルヨリ御成
 規之税納者勿論都テ飼葉等ニ至ル迄毫モ差支ナ
 キニ至ル故ラニ人心ノ相協スル処ニシテ市庭四
 隣ノ者及ヒ村内ニ於テ聊障礙無之ニ付則連署ヲ
 以庭画絵図面相添奉^{マツ}上申候間此段特別ノ以 御
 詮議馬市場之名称 御許可被下置度奉願上候以
 上

明治十二年十二月十五日

南安曇郡明盛村願人池上 定衛印

同 百瀬 守一印

同 三溝茂久太印

代印三溝晴見

同 白木伝重郎印

同 百瀬茂平次印

同 穂刈関郎治印

市庭隣地人 白木 室松印

市庭持主惣代百瀬 謙三印

戸長 降旗 吉十印

長野県令檜崎寛直殿

願書に添えられた市庭は291坪であった。市庭の
 持主惣代は百瀬謙三で、市庭隣地人白木室松、願人
 惣代白木伝十郎と連名で願書を提出している。この
 市庭で9月15～21日の7日間、馬市が開かれた。

1880年5月には、百瀬豊三郎所有地で馬市が開か
 れる。願書は5月17日付で、百瀬守一・三溝茂久太・

白木伝十郎・百瀬茂平次・穂刈関郎次・池上定衛・
 百瀬謙三が願人となり、市庭持主百瀬豊三郎、市庭
 隣地人中村東三郎・藤澤幸三・穂刈賢二郎とともに、
 戸長降旗吉十、さらに南安曇郡長関口侯彦の奥印を
 得て5月18日に長野県へ提出された。その中に「当
 村地引千三百八十番林七反二畝八歩持主百瀬豊三郎、
 右地所二千六百六十八坪ノ内ヲ市庭トナシ、開場ハ毎
 歳九月十五日ヨリ廿一日ニ迄^{マツ}ル七日間興行仕度候」
 とある。馬市庭の場所は、年によって違ったのであ
 る。

長野県は9月22日に、この馬市を許可したが、
 「自今興行ノ都度該郡役所へ可願出事。但定規之税
 金可相納事」と条件を付しており、無税で自由に馬
 市を開催することは出来なかった。

なお、『長野県町村誌 南信篇』（注16）による
 1876年前後の安曇郡南部16か村の馬・牛の飼育数は、
 第3表のように馬3,546、牛272と馬の飼育数が圧倒
 的に多い。

第3表 明治10年前後における安曇郡南部の馬・牛

村	牡馬	牝馬	計	牡牛 (牛計)	備 考
明盛	84	125	209		明治12年
温	107	190	297	20	明治11年
科布	17	331	348	13	明治9年
安曇	3		3	16	明治10年
上野	25	14	39	84	明治9年
梓	247		247	47	明治9年
倭	183		183	6	明治9年
鳥川	14	335	349	53	明治9年
豊科	148	24	172		明治9年
東穂高	2	355	357		明治9年
高家	150	83	233		明治9年
西穂高	249		249	21	明治9年
南穂高	80	100	180	8	明治9年
北穂高		147	147		明治9年
有明	2	274	276	4	明治9年
島内	56	201	257		明治9年
合計	1,367	2,179	3,546	272	

『長野県町村誌 南信篇』より作成

3. 一日市博覧会

安曇郡における商品流通要地である一日市場の地の利を有効に生かし、市場を再興した人々は、博覧会開設にも取り組んだ（注17）。

1875年（明治8）8月の「小博覧会御願書」は、明盛村の市場願人たちによって、まず、次の「奉願口上書」に纏められた。

奉願口上書

夫レ博覧会ハ新智ヲ発スルノ階梯ニシテ海内外
専ラ行レ茲ニ僻遠ノ生民ハ粗々流声ヲ聞而已ニ
テ曾テ其盛事ヲ目撃スル事ナク只寂寥トシテ未
開化ノ形勢ヲ弁知セス遺憾之至ニ奉存候今ヤ隆
政日新ニシテ聖庁ノ恩化ニ浴スル際付テハ安曇
郡明盛村一日市場耕地ハ第九大区中ノ適宜ノ地
ニ付同志ノ者申合茲ニ於テ小博覧館ヲ新築シ耕
務間隙ノ候ヲ待テ三月廿一日ヨリ三十日迄九月
一日ヨリ十日迄毎歳二会ヲ相開キ尤陳列ノ物品
ハ古寄物及ヒ書画新機関且該校生徒ノ揮書等網
羅シ諸人ヲシテ老稚ニ至迄縦観セシメ一目以テ
拭目ヲ数年ヲ期セスシテ愚風ヲ一洗シ漸次人々
ノ智識ヲ弘メント欲スルタメ興行仕度然ル上者
偏陋ノ民ト雖モ盛地ノ人民ニ異ナラス諸物識見
ノ希望ヲ遂ケ難有仕合ニ奉存候間此段寛典ノ以
御詮儀小博覧会開場願之通 御允可被下置度
各村戸長博覧会世話掛一同連印イタシ奉伏願候
以上

明治八年八月

第九大区八小区安曇郡明盛村

願人	百瀬 謙三印
同	三溝 晴見印
同	池上 定衛印
同	穂刈関郎治印
同	百瀬豊三郎印
副戸長	小松錠太郎印
同	宮沢 利平印

同 白木平一郎印

同 松岡三郎治印

同 植原喜太郎印

戸長 中野 蘭印

七小区烏川村 戸長 山口 庫吾印

六小区科布村 戸長 横山 源吾印

五小区温村博覧会世話掛中澤常八郎印

戸長 小穴 愛二印

四小区倭村博覧会世話掛田々井義雄印

戸長 田多井勘司印

三小区梓村博覧会世話掛上兼 久吾印

戸長 森本 六郎印

二小区上野村副戸長 川越禎吉郎印

壹小区安曇村戸長 奥原 権左印

筑摩県権令永山盛輝殿

書面小博覧館新築ノ義聞届候事

但シ開筵之義ハ其都度可願出儀与可相心得事

明治八年八月廿二日

筑摩県権令永山盛輝代理

筑摩県参事高木惟矩 職印

一日市場の小博覧会は、筑摩県開催の博覧会に呼応したもので、1885年9月1～10日に1回、次年は3月21～30日と9月1～10日の2回開催したいとしている。なお、願書は第九大区を挙げて対応する形になっている。

温村野沢の務台景満一代の前掲記録『景満年譜』には、1873年「九月十一日より御天守ニ而三十日之間博覧会有之候」、75年「博覧会四月五月右ニ付裏町正行寺小路ニ大芝居江戸役者也」とある。75年9月開設の一日市場博覧会についても、「一日市場村ニ博覧会付芝居有之」とある。

一日市場博覧会は、博覧館を建てて実施される。第九大区の三小区、四小区、五小区に博覧会世話掛を置き、九大区を挙げて博覧会開催の合意が形成された。博覧会は「新智ヲ発スルノ階梯」と意義づけられた。「海内外」で博覧会が行われているとして

いるので、万国博覧会の存在を承知していたことがわかる。自分たちを「僻遠ノ生民」といいながら、博覧会の「盛事」をみずからの手で実現したい、「老稚」すべてが陳列物を出品して「愚風ヲ一洗」し、智識を広めて「盛地ノ人民」に異ならない「諸物識見ノ希望」を遂げたいと、知識向上への意欲を表明している。

この博覧会は、産業博より文化博の性格を持っているが、見てきたような蚕繭市場・土地産物市場・馬市場と同じ場を開かれたことを見落としてはならないであろう。

明盛村の願人たちは、筑摩県の許可を得ると、ただちに実現に取り掛かった。

口上書

今般小博覧会来ル九月一日ヨリ十日迄興行仕度奉願上候処御許可ニ相成難有仕合ニ奉存候然ル処博覧館新築之義右定日迄間ニ合難ニ付九月中旬迄相延シ十七日ヨリ相開キ廿六日迄都合十日之間興行仕度奉存候間此段 御聞済被下置候様奉願上候以上

明治八年八月

第九大区八小区安曇郡明盛村

博覧会願人惣代 穂刈関郎次印

筑摩県権令永山盛輝殿

前書之通願出候ニ付取次奉差上候以上

右村戸長 宮澤 利平印

願之趣聞届候事

明治八年八月廿七日

筑摩県権令永山盛輝 職印

一日市場博覧会開催は、博覧館の新築に予想以上に時間がかかり、9月1日開会を17日開会へと延ばした。この期日も、出品物が集まらなかったため、さらに延長することとなった。

奉願口上書

今般小博覧会本日十七日ヨリ二十六日迄興行之儀蒙御許可ヲ罷在候処出品物不揃ニ而漸廿一日

ヨリ開場仕候処追々出品有之盛大ニ相成候ニ付期日ヨリ五日之間日延仕当月三十一日迄興行仕度候間此段御許可被下置度奉願上候以上

明治八年九月廿二日

第九大区八小区安曇郡明盛村

願人 穂刈関郎次印

同 百瀬 謙三印

三溝晴見代印

同 三溝 晴見印

世話掛り 中野 闌印

同郡梓村 世話掛り 上兼 久吾印

筑摩県権令永山盛輝殿代理

筑摩県参事高木惟矩殿

右之通願出候ニ付取次奉差上候以上

戸長 中野 闌印

副戸長 白木平一郎印

願之趣聞届候事

明治八年九月二十二日 県印

一日市場博覧会が、具体的な方法を最初から考えて開催されるようになったのは、翌76年4月からで、76年4月7日の「奉願口上書」は、次のように4月25日～5月10日の開催を予定している。

奉願口上書

当村小博覧会之儀者去ル明治八年九月蒙 御許可博覧館ヲ新築シ農間之候ヲ待テ毎歳二会ヲ相開キ申度段御願申上置候ニ付猶又本年四月廿五日ヨリ五月十日迄開場仕度規則書并ニ陳列物品表相添奉差上候間此段 御許可被下置候様奉願上候以上

明治九年四月七日

第九大区八小区

安曇郡明盛村 願人 池上 定衛印

同 穂刈関郎治印

同 百瀬 謙三印

同 三溝 晴見印

副戸長小松錠太郎印

同 宮澤 利平
他出無印
同 白木平一郎印
同 松岡三郎治印
同 植原喜太郎印
戸長 中野 闌印
第九大区惣代 戸長 小穴 愛二印
同 森本 六郎印

筑摩県参事高木惟矩殿

願之趣聞届候事

明治九年四月十三日

筑摩県参事高木惟矩 職印

願書に付された「一日市場博覧会規則」は、1876年4月20日に活字印刷され、博覧会の意義を説いている。

博覧会序

古語曰百聞ハ一見ニ如カズト夫レ人ハ万物ノ靈ニシテ目ハ五官ノ尤モ精妙ナルモノナリ以テ毫末ヲ弁ジ形色ヲ分チ其感覺ヲ腦ニ伝ヘテ人ノ良智ヲ挑発ス若シ視官ノ靈ニ依ラズンバ伉儷モ其愛ヲ欠キ文飾モ其美ヲ失ヒ草木ノ類ヲ異ニシ禽獸虫魚ノ形ヲ同フセザルモ得テ知ル可カラズ況ヤ物ヲ格メ理ヲ窮メ古今未曾有ノ覚悟ヲ発ラヒテ造主ノ功ヲ賛成スルニ於テヤ嗚呼視官ノ智識ニ関係スルモノ甚ダ大也ト云ツベシ是レ乃チ泰西ノ諸国専ラ博覧場ヲ設クル所以ナリ伏テ惟ニ朝廷維新ノ際ニ方テ大中小ノ学校ヲ置キ新聞局博覧場ノ設ケーモ人民ノ智識ヲ開達セザルモノナシ我 筑摩県蚤ニ 朝旨ヲ体シ明治六年十月有志ヲ促シテ博覧場ヲ深志ノ城趾層閣ノ下ニ開キ 天朝恩賜ノ品彙ヨリ邦内及ビ洋外ノ動植礦材機関器具ニ至ルマデ凡ソ天造人製ノ諸物ヲ拮据搜選ニシテ之ヲ縦覧セシム著シテ毎歳常例トナス爾来飯田高山及ビ諏訪高遠木曾大町等苟モ人戸ノ稠密スル処競テ社盟ヲ結び会ヲ設ケ通次物品ヲ伝ヘテ老幼ノ遊覧ニ便ナラシム此ニ於

テ乎其足未ダ闔里ヲ出デザルモノ居ナガラ五洲ノ動植器物ヲ見ルコトヲ得タリ奇説異聞ノ疑ヲ雙耳ニ伝フルモノ乍チ真器宝物ヲシテ信ヲ両眼ニ証セシム恰モ昨夢ノ今事ヲ兆スルガ如シ眉雪ノ老翁寂然トシテ始ニ井見管窺ノ陋ヲ覚リ齟齬ノ幼童彷彿トシテ遙ニ開化維新ノ状ヲ認ム以テ百聞一見ニ如カザルノ虚談ニ非ズシテ視官ノ靈妙ナルヲ徴スルニ足レリ余輩モ亦各地ノ為ス処ニ模倣シテ今茲明治九年四月同社ヲ募リ梅花笑ヲ呈シ黄鶯友ヲ求ムル候ニ乗シテ博覧会ヲ一日市場花園ニ設ケ邦内洋外ノ動植機器及ビ地方ノ物産社寺ノ什宝ヲ募列シ加フルニ管下各小學校生徒ノ作文淨書ヲ展覧シテ兼テ父兄教養ノ心ヲ発起シ子弟勉学ノ力ヲ増加セシメント欲ス伏テ祈ル四方ノ看客靈妙ノ真眼ヲ各種ノ物品ニ注ヒテ其精神ヲ格物窮理ノ学ニ潜メ以テ開明ノ效ヲ得ルアルニ至ラバ余輩区々ノ志モ亦 朝旨 県論ニ沿フモノアルニ庶幾カラン

明治九年四月二十日

一日市場博覧会社

吉見が「まなざしの近代」と定義づけた博覧会を、一日市場博覧会の趣旨は、「目ハ五官ノ尤モ精妙ナルモノナリ。以テ毫末ヲ弁ジ、形色ヲ分チ、其感覺ヲ腦ニ伝ヘテ人ノ良智ヲ挑発ス。」「嗚呼視官ノ智識ニ関係スルモノ甚ダ大也ト云ツベシ。」といい、博覧会を「真眼ヲ各種ノ物品ニ注ヒデ、其精神ヲ格物窮理ノ学ニ潜メ、以テ開明ノ效ヲ得ル」重要なものと表現している。このような意味で「百聞ハ一見ニ如カズ」と言うのである。まさに、「まなざしの近代」の特徴を主体的に捉えている。また、「邦内洋外ノ動植機器及ビ地方ノ物産」とあるところが注目され、「地方ノ物産」を博覧会の展示物に謳い込んでいるのである。

この序について博覧会規則が示されている。

一日市場博覧会規則

第一条

明治九年四月廿五日ヨリ五月十日迄筑摩県下
明盛村ノ内一日市場花園ニ於テ小博覧会ヲ開
クノ官許ヲ得タリ

第二条

毎日会場ハ午前第八時之ヲ開キ午後四時之ヲ
闔ツ

第三条

看客会場ニ入ルヤ必ズ一人毎ニ通券ヲ携ベシ
券ノ価一錢六厘トス門ヲ出ルトキ券ヲ収ス

第四条

出品ハ開場前五日ヲ期トス止ヲ得ザルハ此限
ニ非ズ

第五条

遷入之物品ハ所蔵物ト売物トノ差ヲ分ツ売物
ハ朱ヲ以テ其価ヲ記ス

第六条

各学校生徒ノ作文浄書ヲ展観ス文書輸送ノ使
ハ最寄郵便局ヘ出スベシ

但シ郵便税ハ物品取扱所ニテ是ヲ払フ

第七条

各家ヨリ輸出ノ物品誤テ是ヲ毀壊スルトキハ
会社其価ヲ償フ然ト雖モ非常天災ニ罹ルハ此
限ニアラズ

第八条

各家ヨリ送ル所ノ者ハ物品取扱所三溝晴見宅
ヘ輸出スベシ其輸入スルヤ皆券子ヲ支シ会終
ルヤ券子ヲ照シテ其物品ヲ復ス

附博覧会

演劇

相撲

此外技芸便宜ニ興行ス

明治九年四月

筑摩県管下信濃国明盛村ノ内

一日市場博覧会社

規則に、博覧会の開催日時、看客の心得、出品の
手続きなどが盛り込まれている。出品物は、展示物

と売り物に分けられ、各学校生徒の作文や浄書の展
示は、「序」のなかで、父兄の教養に役立つものと
されている。

前掲『景満年譜』の1876年には、「四月博覧会付
芝居賑々敷事也。松本北深志十番丁ニ而」「一日市
場ニも右同断」とある。ただし、博覧会の内容への
言及はなく、一日市場博覧会を見学したふうはない。
むしろ、「九月七日、八日当村ニ芝居興行、役者ハ
チン子ト号、木戸銭なし、大群衆」とある。この役
者グループについては、1881年（明治14）の同年譜
の記事に、「八月廿七日、廿八日村方学校西ノ原ニ
而芝居有之。チンコと申（す）連中十四五人参り踊
り候。随分上手ノ分也」とある。

博覧会では、演劇などが開催された。次のように、
岐阜県からきた芝居が催された。

附博覧会演劇之御願

岐阜県下第十大区二小区

美濃国加茂郡越原村五番地

芝居渡世 松岡玉三郎

同県下第十一大区十六小区

同国岐阜郡釜戸村五番地

遠山宗兵衛事 芸名市川 治昇

同県下第十二大区八小区

同国恵那郡中津川村二番地

高井五郎吉事 芸名松本高之助

同県下同大区一小区

同国同郡東野村五番地

伊藤春太郎事 芸名市川惣十郎

同県下第十二大区一小区

同国同郡椋実村三番地

度会金十事 芸名尾上金十郎

右之芸人雇入四月廿七日ヨリ五月二日迄芝居上
等興行仕度奉願上候以上

明治九年四月廿一日

安曇郡明盛村 願人 三溝 晴見印

筑摩県参事高木惟矩殿

前書之通願出候ニ付取継奉差上候以上

戸長 中野 闌印

芝居渡世の松岡玉三郎ら5人の芸人が、芝居（歌舞伎）を演じたのであろう。その場所などは、次の願書に窺うことができる。

奉願口上書

今般小博覧会開庭之儀御許可ニ相成難有仕合ニ奉存候兼テ博覧会規則書ニ差加エ奉差上置候通附博覧ニ演劇興行仕度尤博覧会場之儀ハ去ル八年九月蒙許可百瀬謙三所持之地ニ踊小屋ヲ設置有之ニ付右小博覧会場中四月廿七日ヨリ五月二日迄右踊小屋ニ於テ上等興行仕度候付テハ御規則之通税納可仕候猶稽人名前之儀ハ雇入之都度別紙ニ奉書上候間此段御許容被成下置候様奉懇願候以上

明治九年四月廿一日

第九大区八小区安曇郡明盛村

願人惣代 三溝 晴見印

同 百瀬 謙三印

穂刈昇平代印

筑摩県参事高木惟矩殿

前書之通願出候ニ付取次奉差上候以上

右村戸長 中野 闌印

副戸長 植原喜太郎印

同 白木平一郎印

同 小松錠太郎印

書面願之赴聞届候条不取締無之様注意可致且警察出張所へ可届出事

明治九年四月廿五日

筑摩県参事高木惟矩 職印

附博覧会としての演劇は、百瀬謙三の所有地に建てた踊小屋で、前年の1885年には4月27日から5月2日まで開かれたが、1886年には歌舞伎芝居のほか、4月25、26両日に浄瑠璃・手踊り・早替わりも興行された。次の願書がそれを示している。

附博覧会之御願

岐阜県管下美濃国恵那郡大井村

中村 喜市

同県管下同国同郡馬場山田村

後藤文次郎

同県管下同国同郡中野村

可知 仙三

今般小博覧会開場ニ付前頭名前之稽人雇入附博覧会場踊小屋ニ於テ浄瑠璃手踊り早替り四月廿五日ヨリ廿六日迄二日之間上等興行仕度尤御規則之通税納可仕候間此段御許容被下置候様奉懇願以上

明治九年四月廿二日

安曇郡明盛村願人惣代三溝 晴見印

同 百瀬 謙三印

穂刈昇平代印

筑摩県参事高木惟矩殿

前書之通願出候ニ付取次奉差上候以上

右邨 戸長 中野 闌印

書面願之赴聞届候条不取締ノ義無之様精々注意可致且警察出張所江可届出事

但上等税金可相納事

明治九年四月廿四日

筑摩県参事高木惟矩殿 職印

この附博覧会演劇について、『信飛新聞』（第138号、明治9年4月29日）は、雑報欄で「県下九大区一日市場の博覧会も去る廿五日より五月十日まで開きになり、社中も一層尽力する由、珍らしい品がでるでありまじやう、又聞けば博覧会場中新狂言（中萱嘉助騒動かしれません）を興行のよし」と伝えた。結局、中萱嘉助騒動に関する新作歌舞伎は、この地域博覧会で演じられなかったが、企画には入っていた（注18）。

なお、『景満年譜』には、一日市場博覧会に来た市川治昇が、1878年（明治12）温村野沢などの若者たちの指導に当たり、若者狂言を開催したことを特記している。すなわち、「八月頃より当村若者狂言

相催。振付ハ美濃国土岐郡之者市川治昇、同人弟子林長右両人。浄瑠璃ハ伊奈郡之者元神主之由。役者ハ拾耆人、内耆人ハ上長尾之者。九月廿六日、七日、八日迄三日踊ル。晴天ニ而大群衆也。見舞ニ而木戸錢なし。下題ハ忠臣蔵三四、安達ヶ原三雪降道、太閤記本能寺幕、仙台ハギ竹ノ間、桜田騒動一、ノ七幕。四十九年以前天保二卯年狂言七幕、十月廿一日、二日、三日と三日踊り。其後ハ祭り狂言二幕三幕位ハ度々致候得共、大狂言ハ此度迄兩度也」とある。また、『信飛新聞』の記事にある「新狂言（中萱嘉助騒動かもしれません）」に関連しては、1878年の『景満年譜』に「三四月頃中萱多田嘉助之芝居大流行ニ而松本常磐座始在方ニ而所々芝居大繁昌也」とある。嘉助騒動の芝居は、一日市場博覧会附演劇とは直接関係がなかったが、間接的には契匡社自由民権運動に携わる人々が、近世百姓一揆を自由民権運動の先駆と捉え、新作歌舞伎「民権鑑嘉助の面影」として上演する契機となった（注19）。博覧会での演劇が、享受から創作へと進んだ動きでもあった。

ところで、1876年の一日市場博覧会は、9月にも開かれた。予定日の9月17日より遅れて、9月25日～10月8日に開催、演劇も興行された。次の願書が残されている。

小博覧会開庭之御願

九月十九日ヨリ至三十日

右ハ農務之間隙ヲ待テ毎年二会ヲ開場仕来り候ニ付従前之博覧館ニ於テ前書日定メ之通開場仕度尤規則之儀ハ先例ニ基キ申度候ニ付則規則書奉差上候間此段 御許容被下置度奉願上候以上

明治九年九月九日

南第九大区八小区安曇郡明盛村

願人惣代 穂苅関郎次印
同 百瀬 謙三印
同 三溝 晴見印
副戸長 飯沼 寛平印
同 小松錠太郎印

同 宮澤 利平印
同 白木平一郎印
同 松岡三郎次
他出無印
同 植原喜太郎印
戸長 中野 闌
他出無印

南第九大区惣代

戸長 小穴 愛二印
同断 戸長 森本 六郎印

長野県権令檜崎寛直殿 職印

書面願之趣聞届候条不取締無之様可致注意候事
九年九月九日

なお、日延べについては雨天のため博覧会出品物の運び込みが遅れたためであった。

博覧会日延之御願

今般小博覧会九月十七日ヨリ三十日迄蒙御許可ヲ羅在候処雨天打続物品之輸入ニ差支漸廿五日ヨリ開場仕候ニ付十月八日迄日延仕度候間此段御許容被成下置候様奉願上候以上

明治九年九月廿九日

南第九大区八小区安曇郡明盛村

願人惣代 三溝 晴見印
同断 百瀬 謙三印
副戸長 飯沼 角平印
同 小松錠太郎印
同 宮澤 利平印
同 白木平一郎印
同 松岡三郎次印
同 植原喜太郎
他出無印

長野県権令檜崎寛直殿 職印

書面願之趣聞届候事

明治九年九月廿九日

博覧会は、筑摩県廃止で県開催ではなくなったが、一日市場では願人惣代の三溝晴見・百瀬謙三らによっ

て継続された。1876年9月の附博覧会演劇興行の詳細は不明であるが、1877年3月、穂刈関郎次が演劇定小屋の鑑札願を長野県に提出している。

奉願口上書

南第九大区八小区安曇郡明盛村

願人 穂刈関良次

一 演劇定小屋御鑑札願

右ハ今般県税御改正ニ付御成規之通御上納可仕候間御鑑札御下渡シ被下置度尤村方ニ於テ聊故障之筋無御座候ニ付村吏奥印ヲ以此段 奉願上候以上

明治十年三月十三日

右願人 穂刈関良次印

長野県権令檜崎寛直殿

前書之通申出候ニ付奥印仕候以上

副戸長 植原喜太郎印

同 松岡三良次印

同 白木平一良印

同 宮澤 利平印

同 小松錠太郎印

同 飯沼 覚平印

書面願之趣聞届候事

明治十年三月十三日 県印

規模が小さくなったとはいえ、筑摩県廃止後も一日市場博覧会が開催されたのは、地域住民の側からの主体的取組に基づく催しであったことによる。

一方、安曇野の人々による博覧会への関心は内国博覧会に移る。前掲『景満年譜』には、1881年に「三月より東京ニ大博覧会有之。当方よりも見物ニ出発多し」とある。この内国博覧会には、人々がみずからの農産物・工産物などを出品していた。

結びに代えて

1880年（明治13）に自由民権結社奨匡社に加入した一日市場を含む明盛村の社員には、稲葉嘉平太・

稲葉柳三（社員名簿・隆三）・三溝晴見・白木鉄平・百瀬豊三郎・百瀬亥三松・百瀬謙三（社員名簿・謙二）・藤澤永吉・長笠原有瓊の9人がいた。このなかに、一日市場の市場開設、博覧会開催の願人惣代として活動した三溝晴見・百瀬謙三・白木鉄平・藤澤永吉がおり、副戸長の百瀬豊三郎・白木長七郎（鉄平の父）がいたことは、本稿で明らかにしたとおりである。なお、1880年8月調査による明盛村民の家屋建坪などをみると、次のように、彼等がおおむね有力農民で商工業従事者でもあったことがわかる。

稲葉嘉平太：189番地、稲葉留七長男、嘉永元年8月19日生まれ、家屋建坪（稲葉留七）37坪、妻照江は、1886年6月30日に東筑摩郡松本南深志町士族近藤正頼（奨匡社員）長女入籍

稲葉 柳三：224番地、稲葉佐吉養子、三郷村稲葉周二男入籍、嘉永元年正月13日生まれ、1887年8月11日に隆三と戸籍上改名、足袋商（丙類）、家屋建坪39坪2分5厘

三溝 晴見：138番地、天保7年11月15日生まれ、養嗣子長男三溝茂久太（有明村林玉三二男入籍）は製糸製造（四等製造所、25人取り未満・資本金100円未満）・薬種小売商（甲類）を営業、家屋建坪164坪2分5厘内62坪
白木 鉄平：146番地、白木長九郎（北安曇郡社村一志弥惣次二男入籍）長男、万延元年7月11日生まれ、家屋建坪16坪、家族は北深志町にも居住

百瀬豊三郎：181番地、百瀬茂三郎二男、嘉永元年11月10日生まれ、家屋建坪110坪5分、1884年8月村会議員選挙当選6人の1人

百瀬亥三松：167番、百瀬喜久弥長男、文久3年11月4日生まれ、戸長役場隣りで旅籠経営、家屋建坪216坪8分5厘

百瀬 謙三：176番地、百瀬とも養嗣子、三郷

村百瀬堅三長男入籍、弘化3年12月22日生まれ、家屋建坪90坪、1884年明盛村戸長

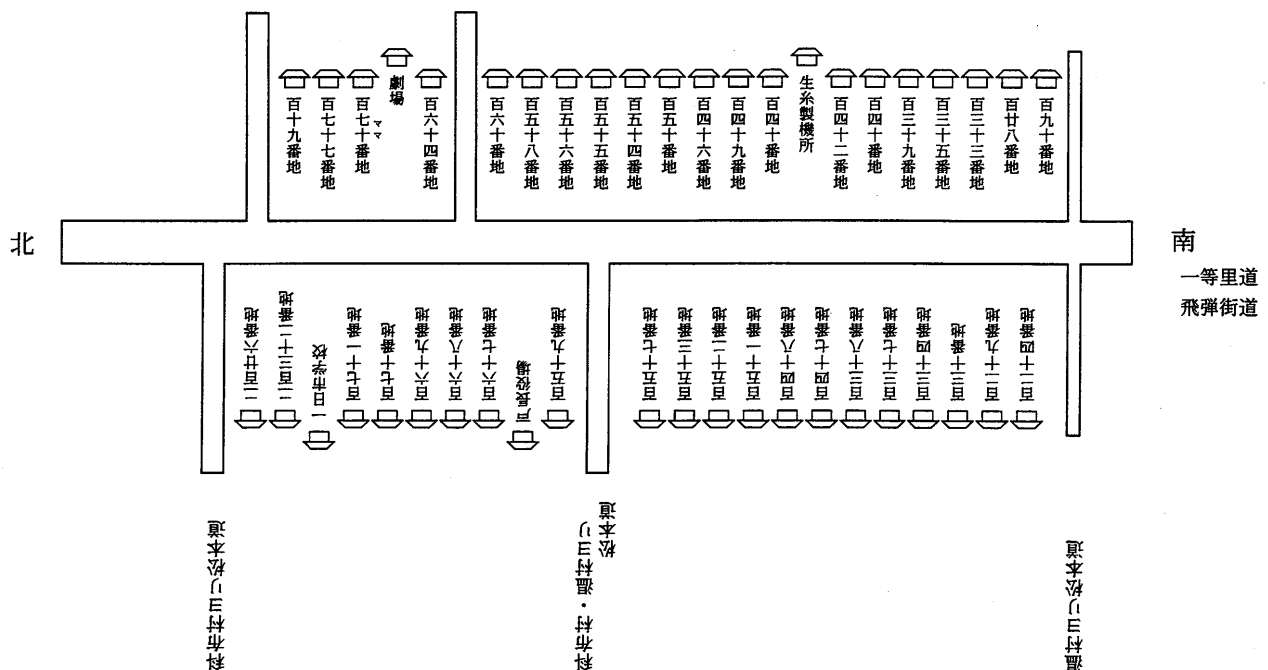
藤澤 永吉：134番地、藤澤幸三養子、三郷村保莉永三二男入籍、幸三は小売り小間物（甲類）・荒物（丙類）、嘉永元年12月18日生まれ、家屋建坪64坪

長笠原有瓊：172番地、三溝弥五左衛門三男、弘化2年3月21日生まれ、農、家屋建坪34坪

彼等が市場や博覧会を開いた場所は、1880年5月の「市場図面」（第1図）によれば、一等里道飛弾街道に面し、松本・大町両方面に通じ、近村の温・科布両村にも通ずる交通要地であった。道路の西側に明盛村戸長役場と一日市学校があり、東側に生糸製機所と劇場（前掲の百瀬謙三所持の地に設置された踊小屋）があって、広域への広がりを持つ政治・教育・文化・経済の一中心地域であった。

図には、市場に面して東側に20戸、西側に20戸が番地を付して描かれている。この40戸の中には、市場・博覧会を企画・実行した百瀬守一（151番地）、百瀬茂平次（154番地）、池上定衛（160番地）などの家があり、一方、奨励社自由民権運動にも参加した三溝晴見（138番地）、白木鉄平（146番地）、百瀬亥三松（167番地）、藤澤永吉（134番地）、百瀬謙三（176番地）などが住み、農業と商工業などを合わせ営んでいた（注20）。

私は、一日市場に明治前期に局地的市場が開かれ、併せて文化・教育・産業の総合的観点から地域博覧会が開催されたことを、奨励社自由民権運動にも関わった中産的生産者層たちが、経済的文化的基盤をつくる歴史的役割を果たそうとしたもの、と評価している。
（2004年9月30日）



第1図 明盛村の一日市場 市場図面（明治13年5月）

注：劇場横の百七十番地は、百七十六番地が正しく、百瀬謙三の宅地と考えられる。

注

1. 大塚久雄『歴史と現代』（朝日選書143、朝日新聞社、1979年）120頁、同氏『大塚久雄著作集 第5巻 資本主義社会の形成 II』（岩波書店、1969年）74～81頁、同氏『欧州経済史』（岩波現代文庫 学術41、岩波書店、2001年）149～158頁
2. 角山栄は、「局地的市場圏」という言葉には違和感をもつが「考え方としては私は大いに賛成」とし、一方、産業資本と商業資本を対立的に捉える大塚説にたいし、「商業資本と一体となったような産業資本」の存在を提示している。私も本稿で事実として角山説に沿うこととなる（河野健二編『資本主義への道 過渡期の社会 構造序説』ミネルヴァ書房、1959年、228～230頁）。
3. 田中彰『明治維新と西洋文明 岩倉使節団は何を見たか』（岩波新書、2003年）144頁
4. 林屋辰三郎『日本史論聚六 近代の模索』（岩波書店、1988年）175～181頁
5. 有賀義人『信州の啓蒙家市川量造とその周辺』（同書刊行会、1976年）64頁
6. 吉見俊哉『博覧会の政治学 まなざしの近代』（中公新書、1992年）
7. 注6書、113頁
8. 注6書、20頁
9. 注6書、123頁
10. 長野県南安曇郡三郷村誌編纂室の収集された資料の提供をいただいた。記して感謝申し上げる。以下に引用する文書は、断りのない限り三郷村誌編纂室から提供いただいたものである。個々の資料所蔵者の注記は省略させていただく。
11. 一志茂樹監修『長野県の地名』（平凡社、1979年）695頁
12. 願人は省略。上記の願人の内、白木長九郎を除く5人からなる。
13. 長野県編『長野県町村誌 南信篇』（長野県町村誌刊行会、1936年）2906頁。一日市場は、1874年に七日市場村、二木村、中萱村と合併して明盛村となった。さらに、明盛村は1954年に温村、小倉村と合併して三郷村となった。なお、明盛村の生糸製造人については、1877年7月に中村千代十、丸山小七、松尾長平、松尾富之助、松尾久三郎の五人が生糸製造人印鑑を長野県に届けていた。ここには三溝茂久太は見られない。
14. 奨励社員に関する資料は、上條宏之所蔵の「奨励社員姓名録」（明治13年3月）などによる。
15. 『務台景満年譜』（南安曇郡三郷村務台久彦氏所蔵）
16. 注13参照
17. 注5著書参照。有賀義人は、「一市場」（一日市場の誤り）に明治8年9月17日～9月26日、9年4月25日～5月15日（正しくは5月10日）の2度開かれたとした（29頁）。しかし、一日市場博覧会は、本稿で明らかにするように、筑摩県廃県後の明治9年9月25日～10月8日に第3回が開催された。筑摩県の施策に応えただけでなく、地域の主体的ニーズを踏まえた地域博覧会の要素を一日市場博覧会が持っていたからである。
18. 『信飛新聞』（第140号、明治9年5月7日）の「雑報」に

「又九大区一日市場ノ博覧会モ新作ノ芝居ヲ催シ随分入りガアル由是ハ旧松本水野氏ノ在城ノ時分苛政ニテ人民塗炭ノ苦シミ中萱村ノ嘉助ト云百姓強訴セシガ旧幕府压制ノ時ナレバ終ニ処刑トナリ程ナク水野氏モ改易トナリ願訴ノ件ハ嘉助ノ情願通りニ改リ土地人民ノ苦ヲ救ヒシ事ガラヲ佐倉宗吾ニ見立テ仕組タルトノ事定テ面白クゴザリマシヨウ」とあるが、同紙（第141号、明治9年5月11日）の「雑報」欄では、「前号載掲イタシマシター一日市場付博覧ノ新作演劇中萱嘉助ノ仕組ハヨク聞ケバ出来ナカツタサウデゴザリマス全タク探訪者ガ途中デ聞誤テ来タノヲソツツカシク書キマシタハ私ノ誤リデゴザルシカシ去ル五日カラ演ル積リデハアツタト申スコトデゴザリマス」と訂正されている。

19. 「民権鑑嘉助の面影」については、上條宏之「中萱嘉助一代記全」および「解説 『中萱嘉助一代記』と自由民権運動」（『信州白樺 自由民権運動百年記念特集号』第44・45・46合併号、1981年）参照

20. 1880年（明治13）3月21日、明盛村戸長役場は、「別紙之通布告布達相廻シ候条、各組下エ講読致シ至急順達留リヨリ返却可有之候也」とし、「伍長衆中」に布達している。その「伍長衆」に列記された氏名は、次のとおりであった。

百瀬 謙三	中村半三郎	白沢市郎次	白沢 玄仲
三溝 晴見	高山 正十	三溝 房吉	白木平一郎
百瀬茂平次	池上 定江	百瀬玄三松	白木傳十郎
百瀬豊三郎	百瀬 兼十	穂刈 為弥	中村東三郎
梅谷 市江	穂刈 昇平	穂刈関郎次	稲葉 倉七
白木 佐作	白木 室松	坂井市五郎	三溝吉太郎
佐々木九郎次郎	鈴木 玉蔵	木藤 沢次	
西沢 十吉	高橋又三郎	高橋 佐十	

この中には、本稿に登場した人々が多くみられる。彼等が、村行政の一端をも担っていたことがわかる。